

# 法眼

第7号 2000年10月

## 多様性と同一性との出会い

日系寺院と禅センターとの集い

奥村正博

北アメリカ開教センター所長

サンフランシスコ禅センターの創立者である鈴木俊隆老師の伝記を読んでいたとき、とても印象的な一枚の写真を見つけた。その写真は、1962年5月20日に行われた鈴木老師の晋山式の折りに撮影されたものである。錫杖を持った鈴木老師を中央にして、サンフランシスコの日本人町を行列する4人の日本人僧侶が映っている。時の北アメリカ開教総監、山田霊林師、そして、加藤和光師、前角博雄師ともう1人の方は氏名不明である。

山田霊林師は、1960年から64年まで4年間ロスアンゼルスの禅宗寺に開教総監としておられた。日本に帰られてからは、駒澤大学の学長に就任され、後永平寺の貫主になられた。

鈴木老師は1959年にサンフランシスコに來られ、桑港寺の主任開教師に就任された。多くの若いアメリカ人が老師と共に坐禅をするようになり、この年、1962年にサンフランシスコ禅センターを法人として結成するまでになっていた。禅センターが1969年に現在のページ・ストリートの建物を買って独立するまで、鈴木老師は、桑港寺の開教師としての活動と禅センターの指導とを同時にされていたのである。

前角老師は1957年、26歳の時に渡米され、禅宗寺におられた後、この写真が撮られてから5年後の1967年にロスアンゼルスに禅センターを創立された。片桐大忍老師は、翌年の1963年に最初は禅宗寺に來られ、ついで桑港寺、禅センターで鈴木老師を補佐された。後1972年にミネソタ禅メディテーション・センターを開かれた。

慈友・ケネット老師は、同じ年、1962年にイギリスから日本に行かれ、總持寺で8年間修行された後、1969年にアメリカに來られた。1970年にはシャスタ・アベイを開かれている。これら4人の老師方が開かれた禅センターから今日アメリカ各地に展開している数多の禅センターが派生していったのは周知のことである。

38年前、その写真が撮られたときには、禅センターというのは、アメリカで、或いは、世界でと言ってもいいだろうが、たった1つしか無かった。それは生まれたばかりの法ひとしずくの一滴であり、禅宗寺や桑港寺などの日系寺院からまだ別れていなかった。鈴木老師の伝記によると、その年の8月に行われた撰心は、禅センターで3回目の7日間の撰心であり、また朝から夜までずっと坐る最初の撰心であったが、鈴木老師は禅宗寺から山田総監を指導者として招請されている。

しかしその後、様々な理由で、長らくの間、日系寺院と禅センターとは殆ど交流なしに近年に至っている。今年の7月、曹洞宗北アメリカ開教センターの主催で、ロスアンゼルスの禅宗寺を会場として、2日間の研修会が行われた。テーマは、「寺院・禅センター運営と宗教活動」であった。これは、日系の寺院の人々と禅センターの人々が共に語り合えるテーマということで選ばれたものである。また今回は、僧侶や指導者だけではなく、寺院、禅センターの運営に携わっている在家の方々にも集まっていた良かった。開教師、伝道教師、在家の指導者、運営に携わっている人々など、36名の方々が、17の寺院、禅センターから参加された。これは、予想をはるかに上回る参加者数であった。各寺院・センターの代表1名に運営と教化活動の現状について10分間の発表をしていただき、その後で、10分間質疑応答をした。参加数が多かったので、時間をそのように制限せざるを得なかったのである。

これは、この地に仏法の花を咲かせるべく、アメリカ社会の文化的な土壌を耕している、日系の寺院と禅センターの僧侶、運営者が一堂に会してそれぞれの場所での活動における喜びと問題点について語り合った最初の機会であった、とても素晴らしい研修会になった。

この研修会において、先に述べた鈴木老師の晋山式の写真に写っておられた、もう1人の日本人僧侶であった加藤和光師にご出席をいただけたことは、殊の外の幸運であった。加藤師は、半世紀の間アメリカで、開教師として、また学者として活躍を続けて來られた。2日目に、加藤師より、日系人社会の仏教の歴史を短い時間ではあったが話ししていただくことが出来た。多くの禅センターの方々にとっては、はじめて聞くことであり、多くの方に興味を持って聞いていただいた。今後、近

くにある禅センターと日系寺院の間で交流を深めていこうという機運も生まれた。

我々は、もっと多くの人々に、アメリカの曹洞禅の源でもある日系社会の中での仏教について興味を持っていただきたいと考えた。また、我々は、アメリカの地での大きな曹洞禅のサンガの流れの構成員として、日系寺院と禅センターとの間の相互理解、交流、友情を深めたいと考えた。この研修会の間、私の心の中に、「多様性と同一性の出会い」という言葉が繰り返し浮かんできた。（「Merging of Difference and Unity」とは、「参同契」の題名の英語訳である。）同一性を見いだすためには、お互いの多様性、違いを学び合わなければならない。この研修会において、我々はその為の大切な一歩を踏み出したように思う。

アメリカの仏教には、2つの流れがある。アジアの仏教国からアメリカに移民してきた人々の仏教と、この40年ほどの間にアメリカ人が、禅や、チベット仏教、上座部仏教から取り入れた坐禅や瞑想を主にする仏教とである。そしてこの2つの流れは、別々の道をたどり、水と油のようではなかなか交わることがないように見える。我々はこのような状況を残念なことだと考える。お互いに学び合い、分かち合えることが多くあるはずである。

それで、我々は、日系寺院の方々と、禅センターの方々に来ていただき、共通の地盤にたって話し合うことが出来る研修会にしたかったのである。この対話を今後とも継続していきたいと願っている。それで今回、加藤和光師と上野暉讃師に、日系社会の仏教について書いていただいた。加藤師には、日系社会での曹洞宗寺院の歴史について書いていただいた。加藤師は、日系社会の仏教と禅センターの仏教とは決して2つの別々のものではないことを強調されて、坐禅堂で坐ることと、お寺の本堂や家庭の仏壇の前で合掌することとは、同じく道元禅師の教えにしたがった修行であると言われる。

上野師も、1963年から、カルフォルニア州モントレイの禅宗寺において開教師として活動を続けてこられた大先輩である。上野師は、日系の仏教徒の方々も、もう少し自分の人生を生きる指針としての釈尊の教えを勉強すれば、儀式や社会的な活動ももっと有意義なものになるのではないかと説かれる。

研修会の共同議長として、今回議論をリードしていただいた澄禅・ベイズ師には、アメリカ人の禅修行者の視点から、この研修会についての感想を書いていただいた。真摯に、熱気を以て議論に加わっていただいた方々、殊に原稿を寄せていただいた3人の方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。

## 法の流れ：日本人コミュニティーにおける曹洞禅について

加藤和光  
北アメリカ開教師

昔、中国では禅の修行者を「道流」と呼んだことがあった。道流とは、同じ目的に向かって学び、修行する人々のことを言うのである。

今日、アメリカ合衆国において禅を奉ずる人々の間には二つの流れがあると言われている。一つは禅センターで修行する人たち、他は日本人町の寺のメンバーのことである。しかし、私はこのような境界には触れないで、アメリカでの曹洞禅、特に日系人に焦点をあてて述べることにする。

ロスアンゼルスに「曹洞宗仮教会」という寺がたてられた。1922年7月のことで、磯部峰仙という曹洞宗の僧侶が建てたものである。1922年頃、ロスアンゼルスの人口は約80万人で、そのうち日本人は2万人も住んでいて、サンフランシスコを凌駕していた。仮教会はその名の通り3年11ヶ月で、新しい場所へ移った。新しい寺は、現在の禅宗寺である。当時、近郊に住む1、434人の日本人の人たちの寄付によって、1926年6月に竣工し「北米山禅宗寺曹洞ミッション」と名付けられた。磯部師の先を見る力、人柄は並み大抵ではなく、その頃のロスアンゼルス日本総領事の大山卯次郎氏も磯部師のヴィジョンに共鳴し、尽力を惜しまなかったという。75年経つ今も、この磯部師の業績は私共禅を修する者たちの脳裏に深く記憶されている。

1926年の禅宗寺創立より30年余り前の1893年に、シカゴでコロンブスの米大陸発見400年を記念して万国博覧会が催された。これと共催でやはりシカゴで世界宗教者会議が開かれた。これに臨済宗の釈宗演師が出席した。たまたまそこで師は、出席していたコネティカット州ラ・サールの出版社社長ポール・ケーラス博士に会い、ラ・サールへ招待された。その際ケーラス博士は若い禅の研究者を是非ともアメリカへ送って欲しくないかと要請した。この招待に応じて渡米したのが、若干27歳の鈴木大拙であった。彼はその後12年米国に滞在して、学問的大作とも言える『楞伽経研究』（ロンドン：ルートリッジ・キーガン・ポール社。1930年）、英訳『楞伽経』（ロンドン：ルートリッジ・キーガン・ポール社。1932年）、並びに後年『Zen Buddhism』という本になった本の初期研究の原稿が書かれた。

その頃、禅はアメリカの一般市民の人々には殆ど知られて

いなくて、東洋の宗教を学んだ僅かな人たちに知られている程度であった。出版物にしても、19世紀末にシリーズとしてオックスフォード大学出版局から、『Sacred Books of the East』が出版され、インド、中国の古典が出たのは画期的であったが、一般向けは皆無に近かった。20世紀初頭になって、曹洞宗の学者、忽滑谷快天が『サムライの宗教』と題して、英文で小さい本を出版している。鈴木大拙の本も忽滑谷快天の本も、西洋社会ではあまり読まれなかった。しかしながら、禅に関する数少ない人の興味が20世紀前半の出版を援け、細々と出版は続けられていた。

米国での1910年度の宗教普及度の統計がある。それに計上された仏教関係のものを上げてみると、仏教各宗寺院数は15、僧侶数は74人、信徒数3,165人となっている。ここには、曹洞宗はまだ始まっていなかった。その五年後の1915年に、サンフランシスコ市はパナマ運河開通を記念して、世界宗教者会議を催した。その時、曹洞宗から1人の代表が出席している。この時の会議は、前のシカゴのエキスポほどのインパクトはなかったが、アメリカでひっそりと暮らしていた日本人の人たちにとって、その直後から数多い仏教寺院が建てられたことから、これは十分な意味を持っていたと言える。以上が曹洞宗の北米開教以前のアメリカの背景である。

磯部峰仙師に戻るが、1922年7月の禅宗寺仮教会設立以前にも、ハワイのホノルルで曹洞宗最初の寺院を建てている。禅宗寺仮教会のなんと2ヶ月前の1922年5月ことであった。そして1926年には禅宗寺仮教会を礎に現禅宗寺を開き、さらにその8年後の1934年には、サンフランシスコへ向けて発ち、桑港寺を同年設立した。

ロスアンゼルス禅宗寺は、アメリカにおける曹洞宗の開教活動の源であり、中心的存在である。1937年に、永平寺、総持寺両大本山の別院となっている。その後禅宗寺へは、常に日本から数人の僧侶が渡米常住し寺務に専務している。曹洞宗もこのアメリカに於ける寺院を重視して、戦前には、短い間に数名の留学生を送り、禅宗寺に滞在し勉学を行なっている。二三名前をあげると、古坂明詮（駒沢大学教授）、大塚道光（愛知高校校長、永平寺監院）、中村宗一（宗務総長）などである。なお、戦前のことであるが、禅宗寺を軸として数多くの学校も建てられた。1931年にロスアンゼルス南のサンペドロに曹洞学園ができた。これは後、光泰寺という曹洞宗寺院として独立した。さらにリバーサイドにも日曜学校、続いてドミンゲスヒルズにも日本語学校ができ、当時これらを総称して「禅宗寺付属北米総合学園」と名付けられた。

桑港寺も戦前、戦後の頃には、サンマテオ、サンノゼ、モントレー、ペタルマなどで月例集会をもって幅広い活動をしてきた。

1941年第二次世界大戦とともに、日本人、そのアメリカ生まれの子供たちは、殆ど全員が、米大陸の各地の収容所へ強制的に収容された。僧侶も、その家族も、この難を逃れることはできなかった。かくて、禅宗寺、桑港寺、またそれぞれの付属機関は、4年間、扉を閉ざすこととなった。

戦後間もなく禅宗寺も桑港寺も、門戸を開いた。全員ではなかったが、戦前からのメンバーも寺へ帰ってくるようになり、活況が再び戻ってきた。ただし、付属機関である学園、集会はサンノゼ、モントレーなど僅かを残すのみで他は門戸を開くまでには至らなかった。その集会も10年程で足が遠くなっていき、途絶えた。

禅宗寺では1947年に月刊『佛心』の発行が始まり、これは、今なお刊行が続いている。1971年には曹禅寺が建った。これが、現在のところ、曹洞宗の日系寺院では最後のものであり、今なお現存している。

1955年に、禅宗寺では新しい次世代へ向けての考察が行なわれていた。まず1926年定礎の寺は四半世紀を経、戦時の空白期で痛みもはげしく、また活動面でもスペースが足りなかった。そこで1ドル献金から始まり、14年かけ1969年に、現在の禅宗寺が完成した。1963年に、当時開教総監をしていた山田霊林師が「禅仏教興揚研究所」を設立し、『正法眼蔵』の講座を開設、自身で講師を勤めた。開教師養成が目的であった。この研究所は山田総監が駒沢大学学長として帰国するまで続いた。

悲観的になるが、今日、禅宗寺のメンバーは約400家族、それに婦人会が30人、シニア・グループの多岐活動をするダルマ・クラブが30人、坐禅会総数30人、寺小屋（幼児教育機関）の子供とその母親の総数が80人である。また禅宗寺に属する禅太鼓（ぜんでこ）が20人程となっている。悲観的といったのは、1969年新本堂建立の家族数からみて、減少していることである。桑港寺も戦前、戦後と比較して減少しているし、ロングビーチ仏教会も同状態で先細りになっている。ただし、近年、禅宗寺の新しいアウトリーチによる活動は、活況を戻しつつあり、付記するに値する。

磯部師に始まるアメリカの曹洞宗開教は、その始めから日本人を対象とする伝統的な寺院方式であった。師の並々ならぬ努力によってできた寺は申すまでもなく、当地の日本人の人の願望と一致しており、短時日のあいだに飛躍的に伸びてい

る。それらの理由を列記してみると、

1. 在外日本人は、日本の伝統の継承を望み、祖先崇拝をふくめて安心、安定のため寺を必要とした。

法要、正月、花祭り、お盆、お彼岸、大晦日の除夜の鐘などが、寺の年間行事となっている。

2. 戦前渡米した一世は、慰めのため、また相談相手のために僧侶を必要とした。

3. 一世にとって、アメリカは新しい世界であり、未知の世界であった。その人たちの英語能力の不足が、自然に外の社会から自分たちを隔離した。寺はそれらの人たちの集まりの場を提供し、また社会的困難、人種偏見などから守ってくれる楯ともなっていた。

おそらくまだ沢山の理由があることは必然である。今日はしかし、社会環境、価値観がかわっているし、日本語だけを話す人たちは減少した。その人たちの子供や孫たちは、アメリカの主流へと入っていった。日本人町で肌を暖めるようにして生きてきた人々、そのコミュニティとしての親しさも、密度の濃さも薄れていった。人々は寺の近くから遠くの郊外へと移っていった。多くの人たちは、コミュニティの中心をなしていたお寺へくるのを億劫がり、来なくなるという現象が続いている。戦前の一世と異なり、戦後渡米した新一世の場合は社会環境が異なっていて、これらの条項はあてはまらない。

1950年代の終り頃アメリカでは「禅ブーム」という社会現象がおこり、所謂「ビート族」と言われた人たちが禅宗寺や桑港寺へ集まってきた。彼等は鈴木大拙氏の書いた禅を読み、アラン・ワッツという人の禅に関する著書、講演、ラジオ放送に心酔した。禅をすべての束縛から解放される思想のように考えていた。

『楞伽経』が初期の禅教団修行者の必携であった五祖、六祖以前の「清規」完成以前の頃の禅の自由さにあこがれていた。50年代の禅愛好者は、厳格なキリスト教のエトスとか、社会的な秩序を逃れて自由になることを、禅の真の自由と思い違いましたようであった。物の実在を空と観て、完全な智慧の般若が得られて始めて到達できる禅の自由は、簡単には理解し難いものであるのである。軽い気持ちの人たちは、間もなく脱けていって、真面目な修行者のみが残り、その人たちが現在の禅センターの創設に参加、1960年なかばから禅センターが生まれ始めた。

このような見地からみると、禅宗寺、桑港寺なくしては、禅センターもあり得ないのである。

仏教徒である我々は、世界は時計の振り子のように、変わらずに同じ運動をするのではなく、常に変化していることを知

っている。禅は東漸して日本へ渡り、日本という風土の中で日本化した。今、禅はまた東漸してこの新しい土地で出発し、75年になる。1928年、千崎如幻という臨済の居士禅を修した人が、サンフランシスコで「東漸禅窟」という坐禅堂を開いた。千崎居士は禅がこの国で根付くものと信じていた。しかし、「東漸禅窟」は数年で終わった。現象である表象的なものは無常で変化は早い。しかし人間が行ってきた生活の根本は何千年も、あまり変わっていない。私どもがもつ老とか死とかへの潜在的な恐れも不安も、何千年も前とおそらく変わっていない。誰でもがそんな恐れとか不安に打ち克ちたいと願っているのではないだろうか。物体が電子とか中間子とかの素粒子の集合体であることを知っていても、人間の体がゲノムとして何億の化学物質の配列で解明できることを知っていても、老死からの不安を柔らげる助けにはならない。科学も、技術も、精神面の空白をみたままでには至っておらず、我々の真の安心への手助けには程遠い。

日本式の禅宗寺、桑港寺、ロングビーチ仏教会、曹禅寺は、表面的な形は禅センターと変わっていても、メンバーの心を癒し、うるおしていることには変わらない。本来のミッションを滞らずに行なっている。この面では禅センターとはなんら変わらない。道元禅師の教えなくしては、お寺もあり得ない。『正法眼蔵』の「授記」とか、「鉢盂」とか、「伝衣」とか、「袈裟功德」とかは、禅センターの人々ほどには意味をもたないかも知れない。しかし、お寺へきた時、自宅の仏前で合掌する時、やはり、道元禅はそこに生きているのである。

曹洞禅という法の流れは、常に一つである。

(筆者は半世紀の間、禅宗寺、桑港寺の移り変わりを見てきた。日系の人たちも、数世代にわたる日系人、戦後新しく渡米し永住した日本人など複雑である。1922年に2万人だったロスアンゼルス日系人は今、その二十倍以上の40万人強に増えている。ところが、各宗ともに仏教寺院はメンバーの減少に危機感を感じている。日本方式の、信徒の方から訪ねてくるのを待つという受け身型から、積極的なアウトリーチ方式に変える必要が生まれていることは必然である。数多い日系人及びアメリカ人たちにいかにして正しい生き方、美しい心のもち方、真に幸せな人生をおしえることは現在の寺の課題であり、我々僧侶の課題でもある。) \*

\* 英文にはこの箇所なし。

## 二・三世の仏教徒に寄せる

上野暉讚

モントレー禪宗寺

かつては、世界の各宗教が、どのように布教すれば他の宗教よりもうまくゆくのかという手段や方法を決定することを主要な問題としていた時代があった。時として、ひとつの大きな世界宗教が他の宗教の信仰をほとんど圧倒するかに見えたこともあった。そのような時代を通じて、闘いといえば宗教と宗教との競争であった。今や形勢は一変した。今日においては、問題は宗教と無宗教との闘いであり、ここのところ無宗教の側に軍配が上がろうとしている。

多くの事実を指摘し、自分の見解を語ろうとするとき、私は大変な勇気を必要とする。というのは、仏教の長い伝統と、あるいは仏教それ自体に対してさえ抗議をすることになってしまふからである。私は1人の在家の信者として発言させていただきたい。まず最初に、私は生まれながらの仏教徒であることを皆さんに理解していただきたい。私は仏教徒の家庭に生まれ、仏教的雰囲気の中で成長した。真実を言えば、私は仏教僧侶の息子であり、両親ともにとても熱心な仏教者である。だから幼少の頃から、自然に仏陀の美しい言葉の数々を教え込まれた。大学では、社会学と言語学を専攻し、かたわら仏教の勉強をした。しかし私は仏教について語るだけの素養を持っていないのかもしれない。

私の心の中に大きな矛盾が起こったのは終戦の時であった。実に戦争は、人類の歴史の中の、適切な説明をするのが非常に難しい矛盾のひとつである。それが人間性の欠陥によって引き起こされたことは疑いのない事実である。しかし、その欠陥を抑止するのに十分なほどに宗教の影響力は強くあるべきであった。しかるに、それをなしえなかったということが、人類社会の進展において宗教が無価値であることを立証するものではないのか。これが私が宗教に対してもっていた反対論の論点のひとつであった。その結果、私は自由思想家になってしまったのである。

この戦争の原因がいかなるものであったにせよ、宗教的な狂信者達が戦時中にとった行動は決して称賛に値するものではなかった。こうして私はますます情動的に反宗教的になっていったのである。このことが皆さんに提示したい第一の問題である。本当に我々は仏教を必要とするのだろうか？

どうか私に自由思想家として語ることを許していただきたい。我々は解決しなければならない多くの問題を抱えている。

そして、私はあなた方の世代に属しているのである。

さて、日系人移民の歴史について手みじかに述べたい。日本からアメリカへの移民は1890年代に始まった。アメリカで働いてお金をもうけ、蓄えた財産をもって故国日本に錦を飾る事を夢に見た独身者たちが最初の渡航者たちであった。しかし二十世紀の初期には、婦人たちが入国するようになり、家庭を築くことができるようになった。このことが、太平洋沿岸、またはハワイにおける日本人の地域的共同社会の成長を促進した。もちろん若干の中断はあったものの、大規模な移民は、東洋人の移民禁止法案が通過した1924年まで続いた。在米日本人社会は今に至るまで続いている。第二次世界大戦の間、米国政府の管理の下に設けられた日系人収容所へ大量に抑留されたにも関わらず、その大部分は依然として太平洋沿岸に存在している。しかし新しい地域共同社会は戦後、太平洋沿岸から離れた都市にも発生した。

おそくとも1898年までには、アメリカ本土の新しい環境のなかで、母国日本のままの生活を再現しようとするいろいろな試みが始められた。その年に、サンフランシスコにおいて、仏教青年会が結成された。仏教青年会は、魂の救いのために作られたのではなく、移民開拓者たちの間にあった自然な望郷の念に応じて、愛する故国の慣習を永続させることができる場所としてのコミュニティー・センターとして利用されたことは明らかである。寺院組織が発達するにつれて、各寺院は、母国とのつながりを維持することを可能とする社会的なセンターとなったのである。日本語を使用できるコミュニティーとして、それら寺院は、移民の世代のメンバーたちに、寺院の檀信徒の運営管理における指導者という、責任ある地位に就く機会を与えた。また敵意を持つ異人種が支配するアメリカの社会環境においてはとうてい望み得なかった、社会的名誉に対する願望を満足させる可能性を彼らに与えたのである。海外開教師たちも、説教をしたり、死者の埋葬をしたり、その他の儀式を適宜執り行うという社会的な活動を展開するようになった。しかし、それらの儀式執行以外には開教師達はほとんど精神的、宗教的な責任を持っていなかったのである。

近年移民グループの子孫である日系の二世、三世の台頭が顕著である。これまでなじんだマイノリティーとしての日本の生活様式に従ってきたアメリカ生まれの二世たちは、親世代の価値観を捨てて新たな文化に好意を寄せるようになった。一般的に日系二世の人達はアメリカの諸文化を取り入れることを志向し、生まれてこの方なじんできた日本的慣習やしきたりに対する両親の執着をあざける傾向が幾分かある。両親の文化を拒否しようとする二世のあいだで、その多数が、仏教を捨て

て、キリスト教各派の教会に入信していることは驚きではない。文化的に欧米生活を目指している彼らにとって、祖先崇拜にかかわる儀礼を行うことに、何の意義も価値もありえないことは明らかである。

若干の例外はあるものの、今日の日系アメリカ人の仏教徒たちが「極楽」という概念に興味を持っていないことは事実である。そして社会的にいえば、寺院の青年会員たちが、仏教に表面的な興味以上のものをもっている信心深い在家信者（というのも、日本生まれの開教師たちはその語学的なハンデに加えて、アメリカの文化の主題とは本質的になじまないという不利な地盤に立たされているから）と出会うか、または、魅力的なレクリエーションなどの行事に参加するかのどちらかによって、お寺のメンバーにとどまると言うことがなければ、一世たちの宗教的欲求のほうが二・三世達よりも純粹である。

事実、大部分の二世の宗教的関心は、真剣なものではないように見える。かれらは両親に要求されてか、同年輩の友人達や隣人との付き合いのために、寺院のメンバーとして留まっているのである。このように日系アメリカ人の寺院における会員数は依然として彼らの日系社会に対する忠実さに大きく依存している。仏教寺院は、キリスト教の教会と同じように、レクリエーション等の催しを提供している。若い会員達を引き留めるために、仏教の教えを大切にするとするよりも、むしろ社交の場としてなじまれる寺院として活動している。

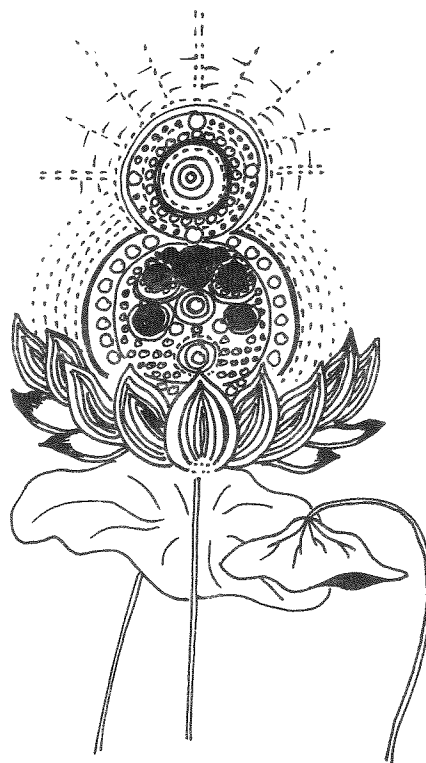
宗教的活動を、アメリカ的な環境の要求と一致させるには、家族、親族の範囲よりもむしろ寺院の内で行われなければならない。それでは、我々は仏教者として何をしなければならないのだろうか？我々にとって仏教とは何なのか？皆さんのご両親が長年にわたって行ってきたことは果たして真実の仏教なのか？いや、仏教は、多くの他の宗教がその教義組織の3つの基本的な柱としている神と宇宙と靈魂の不滅に関して、一切の独断と思弁と空論を避ける。

教主である仏陀は、人生の現実の諸事実を強く主張しているのであり、実験可能な、理性的で実践的な人生の諸事実に基づいて、無益な空論で時間を浪費することなしに、無智によって一切衆生が余儀なくされている悲痛と苦悩に終止符を打たせるのである。

同様に、仏陀は神について、靈魂不滅について、あるいは聖者の死後の存在について、その他、多くの宗教では、基本的な教義を形成する諸問題については一貫して沈黙を守り続け、関わろうとはしなかったのである。

仏陀が関心を持っていたのは、すべての迷いの衆生がかか

っている病気のために、医薬の処方箋を書くことだけであった。未知なものや不可知なものについての、無益な空理空論には全く関わりなかった。真の仏教徒の信仰は論理と科学の基礎の上に置かれているものであり、決して無意味な儀式や祭式の上にはあり得ないということを強調する。『仏教は、方法を包含する』事を思い出していただきたい。



## ロスアンゼルスでの 北アメリカ開教センター研修会にて

### 澄禪ベイズ 禪コミュニティオブオレゴン

2000年7月に北アメリカ開教センターの主催で、ロスアンゼルスにて行われた研修会は、私がこれまで参加した会議の中で最も面白く感動的なものであった。この会議は今までのものとはいくつか異なった点があった。その第一は、僧侶だけではなくそれぞれの日系寺院や禅センターの運営担当者も参加したことである。第二は、その日程がもっぱら、それぞれの寺院・禅センターの代表者の簡潔で、非常に主体的な報告によって成り立っていたことである。このやり方は、生まれた国や年齢がどうであれ、私たち参加者の一人一人が仏法に対する深い愛を持っていること、そして私たち一人一人が釈尊や祖師方の教えを伝え、維持していく重要な責任を背負っているのだと感

じていると言うことをとても鮮明にさせた。すでに喜びをもって引き受けたこの仕事を遂行する中で、様々な障壁に真正面から向かい合い、個人的な困難を耐え忍んでいくことを全員がしっかりと覚悟しているのだと言うことに最も感動させられた。

寺院・禅センターのレポートの中から私は豊富な情報を得ることができた。禅センターの年間予算は小は1万2千ドル（シーダー・ラピッズとモントレイ・ベイ禅センター）から大は330万ドル（サンフランシスコ禅センターの3施設。）まで分布している。その平均値はサンフランシスコ禅センターぬきでは10万ドルであり、サンフランシスコ禅センターを含めば30万ドルとなる。僧侶の経済状況は、老齢年金でやりくりしている人から、月に3,500ドル以上の給料をもらっている人までである。多くの僧侶は教えの場を設けたり、外での仕事を持っている。

寺院や禅センターの施設は、ヨガ・スタジオをかりて坐禅をし、普段は、その物置に坐蒲等をしまっているところや、僧侶の自宅の一部をお寺にしているような小さな所から、サンフランシスコ禅センターのように、様々な大きな建物を所有しているところまで色々である。平均的には施設は1つか2つの質素な建物からなる。

多くの寺院・センターが共通して抱えている問題は、寺院を運営するための資金を集めること、多くの地方自治体が地区制限法を厳しくしているので、新しい寺院を建築するのに難しい規制が加えられ、また今ある施設を改築するのも高額な資金が必要になってきたことに対する対処の方法である。私たちの話し合いのなかで、アメリカに於ける2つのタイプの曹洞禅寺院の間のコントラストがはっきりした。

第一のタイプは、日本からの開教師によって、移民してきた日本人信者のために開創されたいくつかの古い寺院である。これらの寺院は家族と日系の共同体を中心としている。元来、日系寺院は、より大きなアメリカ社会の中で浸透していた人種差別からの避難場所を求めて寺院に来る人々、そして文化的伝統と祖国の言葉を、変わらぬ仏教信仰とともに存続させたいと望む人たちの必要性に応えるものであった。こうした寺院は一般にお盆の行事のような、豊富で多様な季節ごとの行事をもっている。また、日本語クラス、茶道そして太鼓といった文化教室を提供している。禅宗寺のように、若い僧侶が活動しているところもある。その若い僧侶は、外国の地で僧侶としての活動を行う上で、檀家の高齢のメンバーからいただく実際的な支援に感謝の意を表明された。

これらの日系寺院が直面している問題は、死亡によって高齢のメンバーの数が減少していることと、若い世代の人々が仏

教に対して興味を持たず、その多くが仏教徒でない人と結婚することである。ある僧侶が「宗教についての事柄では、母親の願望が優先する。」と話された。若い人たちのキリスト教への改宗は、アメリカ社会に、文化的に同化したいという彼ら自身の願望と、彼らのキリスト教徒の友人の「改宗しない人々は地獄に落ちる」という真剣な信仰によって、引き起こされてきた。

日系寺院の代表者は、若年層を対象としたプログラムを提供している現在の活動について話された。例えば、禅宗寺には若い在米日本人の父母とその子供たちを対象とした、子育ての会がある。禅宗寺と曹禅寺はとても人気があり、良く訓練された太鼓のグループを育成してきた。「二世・三世・世代を越えた」および日系人以外の人々の、いずれであっても、真剣に宗教を捜し求める若い人々のために、いくつかの寺院では、坐禅会や仏教クラスといったプログラムを加えている。

第二のタイプは、日本で日本人の師匠について、もしくはアメリカで鈴木老師、前角老師、片桐老師そしてケネット老師などについて修行したアメリカの第二世代の指導者によって運営されている「禅センター」である。禅センターのアプローチはより修道生活的で、個人的な修行を中心としている。禅センターは典型的に対抗文化（カウンター・カルチャー）の世代に属する修行者のグループの精神的な要求に応じて創設された。彼らは自分たちを真剣な精神的求道者と考え、まずつま先から飛び込んで、そして、悟りを得られるような場所が欲しかったのである。それら禅センターの、（本来偶像破壊的であった）指導者達の命とエネルギーには限界があったので、その教えは禅の本質に焦点を当てられた。老師方はどのように体と心を静めるのかと言う修練の仕方を教え、空から生じる本来的な智慧と慈悲の味わいを修行者に与えた。

こうした西洋の禅センターが成長するに従って、各センターは、子供たちや修行をしない配偶者を含めた、幅広い文化の中で活動を展開するにはどうすればいいか、そして資金の調達や老齢年金の資金といった寺院運営の実際的な細目をどうしていくのかなどの問題に直面している。また、学術的な仏教学の基礎や、檀信徒の教化法や寺院経営などを含んだ、僧侶を養成するための包括的なプログラムが必要なことを認識しつつある。

加藤和光師はコミュニティー・センターとしての寺院と修行道場としての禅センターとの間の固有な両極性の歴史的理理由に照準を合わせてお話しされた。仏陀とその直接の弟子たちは森林に住む修行者であったが、次第に在家の人々が長老のもとに集まり共に学習や修行をし、大乘仏教の基礎を創設した。お盆の祭りの起源は、夏安居を終えた出家者のために、在家信者

が食事をささげ、共に集うたことにある。アジア文化の基本的な単位は家族である。寺院はそのメンバーを家族の数で数え、寺院の生活は全ての家族メンバーの必要を考慮に入れなくてはならない。西洋文化においては、文明の基本的な構成単位はあくまで個人である。従って、これまでのところ個人個人の悟りの追求を援助する形態を強調している。加藤師は、僧侶だけで修行生活を維持することはできないこと、だからそれは在家者の修行を助けるものでなければならないし、在家者からの物心両面での支持が必要であるということを強調された。

こうした2つのタイプに分けられる日系の寺院とそして禅センターがお互いに提供できることや助け合える事がたくさんあるように思われる。

アメリカの修行者は、静かに生活し修行し、生活の糧を稼ぐために苦勞し、苦難と偏見、そして、戦争や、強制収容などの不正な仕打ちに耐えた日本人の開拓者の方々の生き方から励ましを受けることができる。私たちは地域区分法や、政府の官僚政治や、「禅」という言葉を営利目的で不当に利用されること、そして、サンガの中で、時にはトラブルを引き起こす、日常的な様々な問題などによるフラストレーションに直面しながらも、仏法に対する信仰を堅持していくために日系寺院の人々から教訓を得ることができる。私たちは日系寺院から、家族や共同体のための様々な行事について、そしてお盆のフェスティバルで何を販売すればよいのかについて学ぶことができる。

日系寺院は、アメリカ人の禅指導者から、徹底的な学習や修行を通して仏法の真実を体現することを主体的に探求している西洋人や若い世代のアジア系アメリカ人の精神状態や感情の組成に対応して、仏教の教えを伝えるために彼らが工夫してきた様々な試みの中から、どのような方法がより効果的で日系のサンガに取り入れやすいものかを学び取ることができるであろう。それは高齢化しメンバーが減少しつつあるサンガに、若いメンバーの参加によりエネルギーと熱意を取り戻す助けになるのではないか。

私たちは、貧瞋痴（どん欲・怒り・無知）がもたらす人間の苦悩という共通の敵と向かい合っているのである。それは競争の問題ではない。そこには多すぎるほどの苦難が行き渡っている。コミュニティのためのお寺と、修行のための禅センターと、どちらが勝れているか劣っているか等という問題ではない。両者共に、これまで日本の禅仏教を健全に維持するために欠くことのできないものであった。また現在のアメリカの禅仏教が健全に育っていくためにもなくてはならないものである。この研修会は、和合の精神が正しく具現されたものであった。それこそがサンガである。今回この幸ある仕事を一緒に行ったよう

に、これからもいつまでも、私達がお互いに助け合い、喜びを分かち合えることを願ってやまない。



## アメリカの曹洞禅 (2)

サンフランシスコ・ボディ・ワーク

ジョン・マクレ  
インディアナ大学

多くの坐禅堂では、修行者達は、坐禅中は絶対に動いてはいけないと指導される。体を、ちょっとでもそと動かすだけでも、精神集中が失われ、鋼のような固い決心が砕かれることを示すといわれる。長年、私は、「動くな！」という荒々しい声がしばしば禅堂の静かな空間の中に響くのを聞いてきた。一度私は、参禅者の1人ひとりを、筋肉をピクッとでも動かすと容赦なく滑り落ちてしまうような木のプラットフォームに坐らせているグループと1週間の摂心をしたことがある。それは30年も前のことだけれども、その摂心の間、仏教の修行を始めただばかりの、高校生ぐらいの年頃の人が何度も、50分間足を動かさずに坐ってられないと言って叱られていた。私は、しばしば、あんな事が、その人のために何の役に立ったのだろうか



かと考えてしまう。

この夏、私はサンフランシスコ禅センターで週末を過ごし、禅の修行について、6、7人の人にインタビューをすることが出来た。様々なことが議論の中にでてきたのだが、殆どどの人との会話の中にも繰り返してできたのは、身体に対する特有の態度であった。私はこれを、「サンフランシスコ・ボディ・ワーク」スタイルと呼ぶことにした。それは、身体と心の内的な変化に対する注目と、それらの変化に意識的に干渉して影響することを、きびしく差し控える態度との特有の結びつきである。

ある古参の修行者は、ビッグ・サーの近くにあるかなり有名なリトリート・センターであるタサハラで、公式に新しい参禅者の指導にあたっていたことがある。彼は、禅の権威主義との完全な決別であることを殆ど楽しむように言った、「私は彼らに動いてもいいよというよ」と。彼が言いたかったのは、坐禅は体と心の両方に起こりつつあることに耳を傾けることと、そして、体と心を自然に落ち着かせる事とのプロセスだと言うことだった。道元がいったように、坐禅とは、身体と心を「脱落」させることなのだという。1日のリトリートや7日間の摂心は言わずもがな、一炷の坐禅の間でも、身体はうごいたり、たるんだり、坐相に落ち着いたり、内部の緊張を高めたりする。わざとそれらの状態に鈍感になり無視するのは不自然である。

この文脈で、そしておそらくアメリカの曹洞禅全体で、「コントロール」という言葉は禁句であり、深いイデオロギーの地盤で忌避されている。21世紀の先端にあるアメリカ人にとって、「コントロール」は、自由の放棄と人工的な欺瞞の導入を意味する。

今日のアメリカの自由についてのイデオロギーが仏教の伝統の歴史的なパノラマの中に存在することがどれだけ奇妙なことかを我々の多くは、悟らない。1人の禅修行者が私の、東アジアにおける仏教の瞑想についての授業を聴講したことがある。私が心と想念をコントロールする伝統的な方法について語るのを聞いて、彼は瞬間的に反応し即座に手を挙げて質問をした。「心を自由にするのではないのですか？」私は答えた。仏教徒は何世紀もの間、セルフ・コントロールが欠如すると感覚と欲望のおもむくままになり、輪廻に閉じこめられることになる、と信じてきた。したいことを何でも出来るのが自由だという我々に共通する理解とは正反対なのである、と。その聴講者は、前角老師のホワイト・プラム（白梅会）の法系の指導者から受戒した人であったが、その時から私のクラスに来なくなってしまった。

同じように、私のサンフランシスコでの情報提供者達もまた、自動的なそして殆ど物理的な急激な反応で、この「コントロール」という概念にひるみをみせた。この両方のケースとも、この態度は、今日のアメリカの「自由」についての概念とそして宗教的な修行についての曹洞禅の独自の視点との結びつきに基づいているのであろう。この点にそれほど確信があるわけではないが、私には、この結びつきはアメリカの曹洞禅の全体に広く行き渡っているように見える。

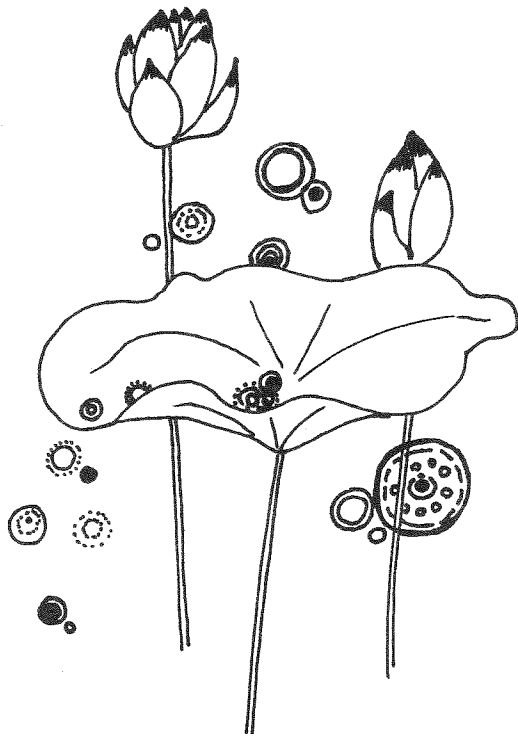
もう1人のかなりの経験を積んだサンフランシスコの禅修行者は、「坐禅の法界定印（右の掌に左の掌を置き、親指で楕円形をつくって、臍の前に置く。）は、坐禅の中で独自の意味がある。両手で、臍下丹田の前に作られるこの静かな円相は、自分と世界との門になり、自分のエネルギーが集中され、分配される通路である。」といった。長年の坐禅のおかげで坐禅中、彼女は全く平安になるのだという。私は坐禅中の彼女を観察したわけではないが、（そして、他人がじっと坐っているのを何時間も観察するという調査方法を採用つもりはないが！）彼女の坐禅に、強要された厳格さが無いことは確かである。もっと重要なことは、私が要約している彼女の説明を繰り返し考えてみると、両手で作る円相についての彼女の解釈は、彼女が述べた、彼女と一緒に修行している同行者との間の相互協力のスタイルに緊密に重なるということである。つまり、彼女と彼女のサンフランシスコの禅センターの仲間達にとって、禅の修行は多数の個人の状況の間の、終わりのない相互交渉の過程なのである。丁度坐禅中に身体の中でおこる変化を見つめそれに反応するように、共同体の中での状況の進展に対応していかなければならないのである。「コントロール」はその構図の中には全く入っていないのである。

この修行者は、サンフランシスコ禅センターの創立者である鈴木俊隆老師がたった一度だけ彼女に怒りを見せた時のことを覚えているといった。それは、彼女が鈴木老師に、自分は呼吸を数えることにより良く集中できるようになったと言ったときである。彼女はそれに感謝し、次には何をすればいいのかと尋ねたのである。老師の返答は、「自分が坐禅をしていると考えてはならない。」というのであった。

ここで私が述べた禅修行者達のように、我々みんなの身体が坐禅中に安楽になれるわけではない。本当のところ、「サンフランシスコ・ボディ・ワーク」スタイルが一般に支持されていることを思えば、わたしには、その道場が修行の時間の中に、ヨガや、ストレッチや強化訓練などを教えないのが奇妙に思える。複数の修行者達が、彼らが表明した態度は彼らの師匠達の指導を取り入れたものであり、他の宗教的な伝統や世界が

ら輸入したものではない、また、禅センターは、長時間の坐禅にそなえて身体を整えるために、実用主義的なことは何もしない、と言われた。何も私は、禅柔軟体操のために時間を割くべきだと主張しているのではない。ただ、そのような組織された活動が欠如していることは、「何もしないで、只そこに坐っている！」というやり方と一貫している事を見出す。

何年前か前、私はハワイにある臨済禅の道場を尋ねた。そこでは、書道や武道が修行の課程の中で重要な位置を占めていた。安居者やその他の修行者達は、毎週、非常に大きな紙に同じ漢字を書くように要求されていた。そして、その先生は、1人ひとりの修行者に、何ヶ月かの間に書いたものを提示させるのだといった。それらを見比べて、その修行者が心理的、精神的にどのように進歩したかを判定するのだという事であった。曹洞系の禅センターでこのようなやり方が使われることは私には想像もできない。そして、もしそのようなことがあるとすれば、私は、それは臨済禅の影響だというレッテルを張るであろう。「コントロール」に関する、「超」がつくほどの過敏性と並んで、アメリカの曹洞禅では、訓練のシステムを作成することを躊躇しているように見える。まして、そのようなことをする指導者を持つとは考えられない。これは、我々に伝えられてきた日本の曹洞禅の教えと完全に合致するものであるかも知れない。しかし、このやり方は、仏教全体の伝統から言えば例外的である。「サンフランシスコ・ボディ・ワーク」スタイルはすばらしくこの時代の、特にそれが育ってきた大都会の、エトス（気質）に適っている。



## 私の『坐禅参究帖』（六）

藤田 一照

パイオニア・ヴァレー禅堂

《断想 16》「凡夫性の封印」

「坐禅

人間が

人間のために

何もしない 姿だから

人間が

人間から解放されて

仏になります」

（小林大二 『いのちのうた 坐禅讃歌』

龍源社より）

\*

「少住為佳—ちょっと一服すればいい。人間をちょっと一服したのが仏じゃ。人間がエラクになったのが仏じゃないぞ。」  
（沢木興道）

\*

（上のお二人の言葉のなかに使われている「人間」という語はすこし意味が一般的すぎて趣旨があいまいになる恐れがある。「仏」と対応させるのなら、「人間」というより凡夫」とか「衆生」というもっと明確な規定内容をもった仏教用語の方が適切だろうと思われる。お二人がここで意味せんとしている「人間」は実はこの「凡夫」・「衆生」としての人間のことであろう。こういう理解にもとづいて、ここでは「人間」という語を「凡夫」に変えて使わせていただく。）

「坐は仏行なり」（『正法眼蔵随聞記』）と言われる。しかしそれが観念ではなく現実のものとなる時には、上でいわれているような、「凡夫のために何もしない」、「凡夫であることを一服する」という「凡夫性の放棄・否定」という契機が、必ず坐禅の中にあることを見落としてはならない。そこをいい加減にすると、みずからの「凡夫性」への「甘やかし」や「迎合」が生まれ、坐禅修行において、「手ごころ」や「妥協」が必ず起こって、坐禅の変質につながっていくからだ。その放棄・否定の契機が坐禅において、具体的にどうあらわれているかをみてみよう。

結跏趺坐（あるいは半跏趺坐）のやりかたで脚をしっかりと組むことは、人間の持つ二足歩行の能力を、一時的に使用不可能の状態にしていることだと言える。それは好ましいもの・こ

とを追いかけたり、好ましからざるもの・ことから逃げたりしないということだ

同様に、「右の手を左の足の上におき、左のたなごころを右のたなごころの上におき、ふたつのおやゆびを、むかえて、あいささう（『普勸坐禅儀』）」という、いわゆる「法界定印」といわれるやりかたで両手を組むことによって、直立することで体を支持する役目から解放された人間の手が持つ能力は使えない状態になっている。それはその手で何かを掴もうとしたり道具を操作したりはしないということだ。

また、「舌はかみのあぎとに掛け、くちびるも歯もあい着くべし」というやりかたで口を閉じることは、社会的動物といわれる人間にとって非常に大切な、言葉を発する能力が発揮できないということである。だからそれは、言葉による他者とのコミュニケーションや働きかけ、とりひきはしないということなのだ。

さらに「善悪を思わず、是非にかかわることなく、心意識の運転をやすめ、念想観の測量をとどむ」ということは、人間において高度に発達した概念操作による思考能力を一時的に「手放し」の状態にすることである。それはつまり、アタマでとりたててアレやコレやと考えをめぐらしたり、はからったりしないということだ。（ただし、それだからといって眠り込むのではない。意識はあくまでもはっきりと覚めている。）

要するに坐禅の時には、人類が長い進化の過程で獲得した、二足歩行、手の使用、言葉によるコミュニケーション、概念による思考といった人間的諸能力が、一時的にせよ、否定・放棄された状態に置かれているということだ。坐禅においては、結果的に、人間が「万物の霊長」といってみずから誇りにしている諸能力が一時棚上げにされてしまうのであるから、それを「人間の廃業」とか「人間の開店休業」、「大死人」と表現してもいいのかもしれない。

ところで、それらの能力が坐禅において棚上げにされるというのはどういう意味があるのだろうか。それは一言でいえば、人間の「凡夫性の封印」ということだと思う。つまり坐禅は、「今は、それらの諸能力を、凡夫たる私の都合のためには、一切使いません。脚、手、口、アタマはすべて、坐禅の作法にしたがって、これこのとおり封印してしまいました。」という凡夫が「お手上げ」している姿勢なのだ。これが坐禅における「凡夫性の放棄・否定」の実際だ。

普段これらの能力が発揮される時は、必ず「凡夫的」に使われている。すべての行動は「こうしたい、ああしたい」、「これがいい、あれはいやだ」という「自分の」欲求や好悪に基づ

いて展開される。あちこち歩き回り、いろいろと物をいじり、ああだこうだとしゃべり、あれこれと考えているのも、煎じ詰めれば、結局「おのれの満足感（モノタリヨウの思い）」の追求のためなのである。これが、凡夫の実態である。これは人間という生物のクセ（習性）であり、業とでもいうべきもので、我々の存在の深いところに根ざす傾向性なのだ。だから、我々は放っておけば、かならずこのクセに引きずられて、諸能力を「凡夫的に」使い続け、「妄動」「迷動」を絶え間なく繰り返す日常の中に埋没していくのだ。

ところが坐禅は、それが正しく行ぜられる時には、それらの諸能力の「凡夫的使用」が一切できなくなるのであるから、必然的にこの傾向性にストップがかかるのだ。それを指して、仮に「凡夫性の封印」とよんだのだ。道元禅師が『弁道話』において、坐禅のことを「三業に仏印を標し（つまり身は結跏趺坐して動かず、口は閉じて語らず、意は作仏も図らず、心意識の運転をやめる）三昧に端坐する」と表現しているように、坐禅の時には、三業のどこにも「凡夫印」があってはならず、ただ「仏印」のみが標されていなければならない。だから普段は「凡夫的」にしか働いていない脚、手、口、アタマから「凡夫印」をはずし、そこに「仏印」を標することによって、それら一切を「仏的」使用にふりかえるのだ。それは、凡夫の生身がそっくりすべて供養されて、仏の体になってしまうということだ。（『坐禅用心記』に「即標諸仏体」という言葉がある）

それは凡夫の私にとっては、自分の凡夫性がまるごと、仏印によって「封印」されてしまい、まったく身動きできなくなってしまふことに他ならない。その坐禅の姿勢に邪魔されて、凡夫性に染まった行動をとることが一切不可能になってしまうのだ。つまり、凡夫の私が、坐禅に磔（はりつけ）にされて、凡夫性を発揮できなくなるのだ。こうして坐禅のなかで、私の「凡夫性」はありながらありつづけてしまう。

ここで忘れてはならないことは、「凡夫」にとっては「封印」であることが、同時に「仏性」をよびだす「開封の印」でもあるということだ。坐禅の姿のあらゆるところに仏のめじるしははっきりとあらわれ、仏が活発地に躍動しているのだ。坐禅においては、そこに「凡夫」が封じ込まれることと、そこから「仏」が躍り出ることが、同時同所で生起している。たとえば、結跏趺坐に組んだ二本の脚は、二足歩行ができないのだから凡夫側からいえばいわば「死に脚」となっているのだが、同時に「坐相みほとけ」（横山祖道老師の造語で坐禅の形が仏そのものということ）の側からすれば仏の体の欠かせない一部となって「成仏」しているといえるのだ。手、口、アタマなど他のどの部分についても、同様のことが言える。

坐禅における「凡夫性の放棄・否定」という時、注意しなくてはならないことは、その「凡夫性」とは、我々のなかに固定的な対象の実体としてあるものではないということだ。それは我々の「状態」なのであるから、それを放棄・否定するといっても、「もの」を捨てるような訳にはいかないのだ。本当のところは、放棄とか否定ということを全く念頭に置かず、ただ坐禅を坐禅として端的に行ずる時、三業に標された仏印の力により、「凡夫性の封印」が完遂され、結果として凡夫性が放棄・否定されるのだ。

だから、今まで「凡夫性」の「放棄・否定」とか「封印」とかについて長々と書いてきたが、それはあくまでも或る観点に立って、坐禅を外から眺めて論じたに過ぎないのだ。確かに坐禅にはそういう契機がないとはいえない。しかし、坐禅を行じる当の者にとっては、「凡夫」とか「仏」とか「放棄」とかそういうことは一切どうでもよいことなのであり、大切なのは、今ここの坐禅をいかに純粋な坐禅たらしめるかというその一事にかかわる工夫・努力だけなのだ。

## 北アメリカ開教総監部・開教センターニュース

◎ニューヨークの禅マウンテンモナストリー道真寺で6月13日から18日まで創立20周年記念行事が行われ、秋葉玄吾北アメリカ開教総監と奥村正博北アメリカ開教センター所長が17日と18日の法要に参加しました。

◎ジャスタアベイで9月3日、4日に創立30周年記念法要並びに慈友ケネット老師舍利塔の開眼法要が行われ、秋葉玄吾北アメリカ開教総監、奥村正博北アメリカ開教センター所長、宮前憲生書記が参加しました。

◎曹洞宗宗務庁は、宗務庁国際課の加藤秀典書記と横山泰賢北アメリカ開教センター書記を、8月より10月まで7カ国19の禅センターの視察に派遣しました。

◎10月28日に道元禅師ご誕生800年記念法要が、北アメリカとハワイの日系アメリカ人の曹洞禅コミュニティと共にネバダ州のラスベガスで行われます。

◎道元禅師750回大遠忌予修法要が2001年5月12日に禅宗寺（予定）で行われます。

## 北アメリカ開教センター活動予定

2000年11月～2001年3月

### 宗典講読会

日時： 11月19日、12月17日、2001年1月14日  
2月11日、3月25日の各日曜日  
午前 8時30分 坐禅  
9時10分 朝課  
9時30分 作務  
10時 奥村正博開教センター所長による講義  
会場： カリフォルニア州サンフランシスコ桑港寺  
内容： 正法眼蔵（仏性の巻）

### 仏教講演会

日時： 11月3日、12月1日、2001年1月5日、2月2日  
3月2日、の各金曜日  
午後6時30分 坐禅  
7時20分 提唱  
会場： カリフォルニア州サンフランシスコ桑港寺  
内容： 11月3日 マーク・ゴナーマン氏  
スタンフォード大学研究員  
「ゲーリー・スナイダーの果てしなき山河（第2回）」

12月3日 マーク・ゴナーマン氏  
スタンフォード大学研究員  
「ゲーリー・スナイダーの果てしなき山河（第3回）」  
1月5日 マーク・ゴナーマン氏  
スタンフォード大学研究員  
「ゲーリー・スナイダーの果てしなき山河（第4回）」  
2月2日 龍心・ヘラー師  
サンフランシスコ禅センター  
「仏教の社会活動」  
3月2日 法山・スナーキー師  
ブディストピースフェロウシップ  
パークレイ禅センター  
「仏教の日常生活」

### 掬心

日時： 2001年2月18～25日  
場所： ソノママウンテン禅センター